

石川啄木の国家認識

—— アメリカとロシアを通して ——

はじめに

石川啄木は大国であるアメリカとロシアを、どのように認識していたのであろうか。啄木とロシアについて論じたものは、吉田孤羊『啄木とロシア』^①や、志水速雄「啄木のロシア」^②などがあり、またロシア文学を論じたものは草鹿外吉「啄木とロシア文学」^③など数多く存在している。啄木と現実のアメリカについて論じたものはほとんどないが、啄木とアメリカの文学に関しては、森一『啄木の思想と英文学』^④や、岩城之徳・藤沢全の「アメリカの詩集と石川啄木——新発見の詩稿ノート『EBB AND FLOW』を中心に」^⑤などの調査研究がある。

このようにアメリカとロシアについて、それぞれを個別に考察した論文はあるのだが、しかしこの両大国を合わせて考察した論文はない。私は啄木のアメリカへの認識、それからロシアへの認識を調べてゆく過程で、啄木の個別の国、民族への関心よりも、啄木がこの二つの大国に対してどのような共通する認識、あるいは逆に相反する認識を持っていたのかに関心が移っていった。その結果啄木独自のと思われる共通の認識の仕方のようなものを、感じるようになったのである。本稿でそのようなことを、少し指摘してみたいと思う。

二八

池 田 功

1

残念ながらというべきなのだが、日露戦争時代の啄木はロシアへの人種的偏見に満ちた文章を、「戦雲余録」(明三七・三)に書いていた。

◎一言にして云へばスラヴの帝国と云ふ者の、実は露西亞程雜駁な国民を持つて居る国は世界にない。或学者の如きは、露帝配下の人種を分類して見ると殆んど六十種に上ると唱へて居る。譬へて云へば露国は世界の動物園だ。獅子や虎やの様な強い者もあるには相違ないが、またタータルとか西伯利亞土民とか、甚だしきはエスキモーなどと云ふ下等人種をも含んで居る。

という具合である。この「戦雲余録」には、「◎仏人で人種哲学の首唱なるゴビノウ伯は」云々と記されているが、上田博『戦雲余録』から『渋民村より』^⑥で、このゴビノウの人種哲学については、森鷗外の『人種哲学の梗概』(明三六・一〇春陽堂)から得た知識であることが具体的に指摘されている。また、上田氏は「啄木のロシア(人)観は姉崎嘲風の『ロシアの国情とトルストイ』(『時代思潮』明三七・三・五)に拠っていると思われる」とし、その部分を比較している。つまり、啄木は「嘲風の影響をうけて、ロシア人を『ドイツ種の閥族』と『純粹ス

『ラヴ民族』とに区別し、前者の後者への抑圧を指摘するが、その一方ではロシア人を全体として下等人種呼ばわりし、狡猾、ペテン主義の悪罵を投げつけ、ロシア（人）への憎悪をかき立てて「いるとする。しかし嘲風（ちょうふう）のものは、もう少し「スラヴ種ロシア人の人間的美質に深く同情を寄せている」と、啄木と嘲風との相違を指摘している。

上田氏の論文で教えられるのは、日露戦争の時代にロシアの人種について記された論文が発表されていたということと、また啄木はそれらの影響を受けつつも、啄木なりの偏見が示されているということである。

啄木は時代の影響を受けてロシアに対して人種的な偏見を記していたが、しかしアメリカに対してはそのような偏見は記していない。一九〇六年（明三九）九月に、アメリカのサンフランシスコやバンクーバーなどで日本人学童が排斥されたり、日本人街が襲撃される暴動事件が起きていた。澤田次郎『近代日本人のアメリカ観』^⑦では、これらに対して徳富蘇峰は、「人種問題を痛感させた。移民問題の原因には経済問題もあるが、その根本的理由は人種の相違に他ならない」と考えたこととされることが記されている。しかし啄木はこのような日本人をも巻き込んだ、アメリカにおける人種問題には全く触れることはないのであった。その理由はよく分からないのだが、しかし、日本のアメリカ報道のあり方からその一端を推測することはできる。

北岡伸一「初期『太陽』に見るアメリカ像―日清日露戦間期日本外交に関する一考察」^⑧には、啄木が親しんで読んでいた雑誌「太陽」のアメリカ報道の分析が示されている。それによれば、この雑誌で「特徴的なのは、その親英米的姿勢」であるとし、その理由は「『太陽』では、清国分割の推進者がロシアついでドイツであると判断し、イギリスおよびアメリカが友好国であるという明確な判断が」あったからであるとしている。また、先程の澤田氏の論文の中には、一九〇六年（明三九）から

一九〇八年（明四二）の、「第一次日米危機の時代」に、アメリカでは「組織的な反日キャンペーン」が繰り広げられ、「日米戦争論」が議論されていた時代にも、「日本側では、かような議論はほとんど現れることはなかった」ということが記されている。日本におけるアメリカ報道は、反米的なものはいくつもなく、ましてや人種問題に触れたものはほとんどなかったと考えられるのである。つまり、啄木だけの問題ではなかったということである。蘇峰など独自のネットワークによる情報を得ていた人たちのみが、その真意を推し量ることができたのであった。

さて、この人種問題との関係で興味深いと思われることがある。それは啄木が、「◎ゴビノウ伯は、露西亜の専制政治は能く国民の性情に適合した政体であると説いたが、所詮（しよせん）之れは歴史を過重した結果の論で、決して真に露民の性情を達観した者ではない」と、ゴビノウの考えを批判した上で、「否（いな）寧ろ、事相発展の理法を閑却（かんくつ）して、因襲的外観に幻惑した議論である。……現今の露国は君主専制国ではなく官吏専権の圧制政治の国たるをやだ。」と、自説を主張しているところである。

この「事相発展の理法」というのは、拙稿「石川啄木―社会進化論の影響（一）（二）」^⑨で記したように、啄木が社会進化論に接して得た法則である。初期の啄木は「事物進化」や、「自然進化の当然なる理法」（寸舌語）明三五、三三 などという表現をずっと使い続けていた。たとえば小林茂雄宛書簡（明三五・七・二五）では、与謝野鉄幹・晶子の新詩社「明星」と、正岡子規の根岸とのいづれに与するかの判断に使われている。「さて、両派の体度（たいど）は如何と云ふに根岸は保守で鉄組は進歩だ」と記し、「其処（そこ）では有様（ようさま）を事物進化の理法に照らして見るとすぐ其末路（そのまつろ）が鏡（コレハ）地獄の照魔鏡（しょうまきょう）の兄弟ならん？」にうつる。一体如何な事でも時運の動いた時は保守は只僅かの反動として止み、進歩が最後の建設をす

るのである。(中略) 一方は年老いた驚馬で、他は緑の大野にかけまわる二歳駒である。何れが千里の遠きに行きうるかは、判ずべく必ずしも巧妙なる馬喰を要せぬ。」という感じである。

この判断基準は、次に記す高山樗牛の影響を受けて、さらに強固なものになってゆき、啄木の一つの認識の仕方になってゆく。「無題録」(明三六・一二)と「戦雲余録」で、樗牛の文を次のように引用して、自説を展開している。

◎哲人樗牛が這般の理を寓して、「新らしき声の尤早響かずなりたる時、人は其中より所謂法則なる者を作り出す。之を以ての故なり、法則の栄ゆる所必ず生命の死滅あるは」と説いたのは全たく真理である。保守主義を具体的にすれば、法則が生れる。宣なる哉、昔から保守的人に高渾空靈な理想を抱いた者は一人も無かつた。生命の死滅を防ぐには、革命と戦争の興奮剤を投ずるに限るのである。

というものである。これは樗牛が明治三五年五月の雑誌「太陽」に書いた「法則と生命」の、「新しき声の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂法則なるものを造り出だす。是を以ての故也、所謂法則の栄ある処、そこには必ず生命の死滅あるは！」がもとになっている。

啄木は以後この樗牛の論理を自らの法則にし、ロシア認識の背後に適用してゆくのである。つまりロシアは「因襲的外観」により保守的になり、法則が栄え既に新しい声が起こらなくなっている。こうなつては生命は死滅してしまう。だから破壊して出直さなければならぬという考えである。いわば国家を生命体としてとらえているのである。この論理から日露戦争も正当化されてゆく。上田氏が指摘するように、「日本の口

シアへの戦争行為が、専制政治の暴圧に苦しむロシアの民衆を解放する正義の戦争であるとする『戦雲余録』全体の主題」になってゆくのであった。

一方アメリカとの関係に対しても、この判断基準に近いものが適用されることがあった。先程も記した澤田氏が指摘するように、「明治三十九年(一九〇六)十月、サンフランシスコで日本人学童隔離問題が起こつてから日米紳士協約の交渉が終了した明治四十一年(一九〇八)に至るまでの期間は、『第一次日米危機の時代』とされ、欧米で黄禍論的な日米開戦説が出現した」のであり、さらにその後は、満州の權益をめぐり日米で激しい衝突がおき、「日米開戦論がアメリカで再び盛んになった『一九一〇年代の日米危機』の時代」が訪れたのであった。

啄木はこの満州問題をめぐって「百回通信」(明四二)の中で、「◎米国政府が、満州諸懸案に関する過日の日清協約を以て、門戸開放主義及びポーツマス条約を無視するものとし、帝国に向かって抗議を持込みんとする意思ありとのことは」云々と事実を記した後で、「◎小生は寧ろ噂の如く米国より抗議の来らん事を願ふ。その抗議の飽迄強硬ならん事を願ふ。」と記している。普通の日本人なら日本の肩を持ち、アメリカの抗議を批判するところであろうが、啄木は反対に抗議が来ることを望むという。何か不思議な意見である。

実はこの日米関係に、次に続く文章がそれを物語っているのであるが、先ほどロシアにも見られた論理が適応されているのである。「世界を挙げて終局なき戦ふの日の一日も早く来たらん事を願ふ。然る後に現在の人間生活が多少改まる事もあらん」と。ここには「事相発展の理法」というような言葉はないが、先程の「戦雲余録」の「生命の死滅を防ぐには、革命と戦争の興奮剤を投ずるに限る」という言葉が当てはまること

が分かるであろう。しかし、なぜ「戦争」が必要なのであるか。その理由は「戦雲余録」に記されている。この中で啄木はまずゴビノウの文明論を引用している。「一つの文明が発達して最早展開の余地なきに至ると、向上の精神が滅する。今迄に贏ち得た所を失ふまいとする、即ち保守的になると断じた。自分の見る所によると、此文明の保守的に傾く第一歩は、同時に其文明の破滅の第一歩である。」と、その上で平和について次のように記している。

◎平和と云ふ現象も亦完たく文明と性質を同じくして居る。世界史の何の頁を探しても、進歩的な平和の時代は見付ける事が出来ない。又平和の頁の次には、戦争か、然らずんば墮落の頁が来る、世界には永遠の理想があるので、決して一時の文明や平和に安んずる事が出来ぬのである。それだから、一路精進の念の消え失せた文明や平和の廢頽を救ふには、唯革命と戦争の二つあるのみである。そして此二つは、永久に世界文化の行程に新しい勢力と局面とを導き来る関門であるのだ、平和と云ふ語は、沈滞や屈辱と意味が同じでない。

というように、「一路精進の念の消え失せた文明や平和の廢頽を救ふために、「革命と戦争」が必要であるという論理である。確かに比喩的にであれ、閉塞的な現状を打開するための啄木独自の論理を示しているのであるが、やはり言葉が少し不足しているために、誤解されかねない表現である。

このように啄木のロシア観とアメリカ観とを比べてみると、人種問題という点で大きな差があることがわかるが、日露戦争や日米関係に、樗牛の「法則と生命」をもとにした事物進化の当然なる理法というよう

考えが適應されている点で、大きな認識としてみたときには共通していると考えられるであろう。さらにもう一つ、ロシアとアメリカに共通すると思われる認識の仕方が、日露戦争をめぐる言説の中にもある。

2

日露戦争は一九〇四年（明治三七）二月八、九日の旅順の奇襲攻撃により開戦した。無邪気なまでにナショナリストであった啄木は、迷うことなく民心と共に開戦に興奮した。

「号外とび、車かける」てふ都の空、（中略）戦の一語は我らに取りて実に天籟の如く鳴りひびき候。急電直下して民心怒濤の如し。（中略）その辻、この軒端には、農人眉をあげて胸を張り、氷を踏みならし、相賀して、hey! ho!の野語勇ましくも語る。酔漢樽をひつさげてザールの首級に擬し、村児群呼して、「万歳」の土音雷の如し。（中略）飛報あり、露艦二隻仁川に封鎖せらる。肉踊り骨鳴る。（中略）小生は近く「愛国の詩」を賦して、唱へんとして歌なき民衆にそなへんと存じ候。（明三七・二・一〇・野村長一宛）

という具合であった。この日露戦争における陸軍の兵員動員は八七万人にも上り、その約八〇%の六九万人が実際に戦場に送られるという未曾有の大戦争であった。とりわけその年九月から十二月まで続いた二〇三高地攻略は、ロシア軍の猛反撃を受けて死傷者五万九四〇八人、うち死亡一万五四〇〇人をだして陥落させ、旅順を制圧した。しかし、「日本は戦争を続行させていくに足る人も金も物も尽きていた。（中略）戦

争が継続すれば逆転の可能性は十分にありえた。」^⑩という状態であった。講和が待ち望まれていた。ついに一九〇五年（明三八）六月一〇日に、アメリカ大統領のルーズベルトの講和勧告に応ずることを回答したのであった。

啄木はさっそくこのことに言及する。

吾人の尊敬する偉人ルーズベルトが、両国交戦国に与へたる平和談判開始の警告也。（「閑天地」明三八・六、七、

ブライアン氏日本に遊び、叫んで曰く、人道と世界の平和の為に尽したるルーズベルトの功績に比しては、両交戦国の何れかよく永久の功績ある、と。吾人亦ブライアンに和して、全米国の国民的精神を代表する真骨頂児、ルーズベルトのために祝盃をあぐ。彼ありて今、北米合衆国はその存在の価値と意義とを昇天の勢を以て増進しつゝあるに非ずや。（「古酒新酒」明三九・一）

という調子で、ルーズベルトの偉大性を称えている。もちろん当時の新聞の見出しにも、「ローズベルト米大統領、調停を準備」（明三八・六・二「大阪毎日」）など、ルーズベルトの名が大きく書かれており当然のことのようにも思われるが、しかし、啄木の認識は国家というよりも、「全米国の国民的精神を代表する真骨頂児」、「彼ありて今、北米合衆国はその存在の価値と……」云々というように、より偉大なる個人の方に心が向いている。

さらに同じ事は、少し前の「秋草一束」（明三七・一一）に、「北米合衆国の建設は、ワシントンの正義と自由に対する憧憬、乃ち其時代の状態の反抗によらざりしか。」というように、ワシントンに代表させてしまふ言説にも示されている。偉人や英雄の存在にそれが集約され、国家

の判断基準にも適用され評価されてゆくのである。しかし、それは個人崇拜ということではなく、あくまでも判断基準のモノサシの一つにされているという意味である。

これと同じ様なことが、ロシアにもなされている。「林中書」（明四〇・三）で啄木は、日露戦争の勝利により日本が一等国になったことを認めつつ、しかしそれはあくまでも、「日本の軍隊は確かに露西亜の軍隊に勝った」ため、「兵卒が露西亜の兵卒と競争して優勝旗を獲た為」であって、「軍事ならざる他の一切の事までも世界一」になったわけではない、「日本の文明が露西亜の文明に勝ったのではな」いと、たしなめる。その上で、

革命の健児の陣頭に立つて聖架を擎げたる唯一のガボン僧正を有する露西亜人の方が、却つて天の寵児ではあるまいか……今年の夏、ゴルキイ氏が北米の新聞記者に語つた所によると、カンといふ露西亜の一地方の農民共は、飢饉救助の為に政府で与へた若干宛の金を以て、麵麴を買はず衣を需めず、皆挙つて銃と弾丸とを購つたと云ふではないか。……彼等の奪はれたる自由を取り戻すべき武器であるのだ。露国の農民は実に「自由の民」である。

と、ガボン僧正やロシアの農民の自由を求めた行動、闘いの方を評価し、「日本人は近代の文明を衣服にして纏ふて居る。露人は之を深く腹中に蔵して居る。……トルストイ伯は何故日本に生れずして露西亜に生れたのであらうか？」と、むしろロシアの方の肩を持つのである。同じようなことは「古酒新酒」にもある。

軍事を外にしては、我が大和民族は未だ決して大なる国民に非ず、

てふ経験は、吾人の尤も悲しむべしとする過去の教訓の第一也。何が故に然か曰ふや、答へて曰く、帝国は未だ一の民族的代表者、天才の一大人格者を有せざれば也。……自覚を体得し色読したる活人格者乃ち民族の大天才の一人を欠けり。

という具合に、「天才」という表現ではあるが国民を代表する偉大なる存在により、国家や民族が評価されると記している。もっと言えば、小説「雲は天才である」(明三九稿)にも、「トルストイは生きて居る。ゴルキーが以前放浪者で、今肺病患者である。露西亞は日本より豪い。」と記していたのであった。

このように啄木のアメリカ観とロシア観に、多少なりとも共通する見方があるとすれば、大国の中にどのくらいの偉人や天才あるいは自由のために闘争する人たちがいるか、というような判断基準によってなされていたということである。

また、とりわけ日露戦争後の時代に、軍勢力や兵隊の強さだけでは駄目であると繰り返し主張していることは注目されることである。日本の近代はまさに「富国強兵」であり、それにより一等国になろうとしたのであるが、啄木はこの考えをあつさり否定し、真の偉大なる国家は文明を「深く腹中に蔵し」ていなければならぬと主張しているのである。

このように偉大なる存在や自由のために闘争する人たちにより、国家や民族を判断するという認識の仕方は、アメリカとロシアばかりではなく、実は中国に対してもなされていた。そのことは拙稿「石川啄木の中国認識——『哥老会』と『辛亥革命』をめぐる——」^⑪にも記したが、少し指摘しておこう。

啄木は「空中書」(明四一・一〇)で、ロシアと中国との同意性を指摘

すると共にその魅力も指摘している。

◎世界に二大伏魔殿あり。一は即ちザールの天下にして、他は即ち愛親覺羅氏の国。◎境土の広袤なる、雑多の民族を含みて其蒼生の無数なる、国富の未だ全く開拓せられざる、専制君主国たる、両者悉く相似たり。而して、其治道ばず、其化洽からず、所在不平の党ありて、禍根深く民心に潜める事、両国また偶ま其軌を一にす。◎両国共に嘗て一度帝国と兵を交へて敗る。……帝国は未だ嘗て清露両国に勝たざるなり。敗れたるものは、清国に非ずして北京政府と其軍隊のみ。露国に非ずしてザールの政府と其軍隊のみ。

と、啄木なりの判断をし、その理由を両国の「国民の潜勢力は世界現局の未知数」であるからとする。もっと具体的にいえば、ロシアにあつては「◎ザールの輩下に睡虎あり、仮に呼んで虚無党といふ。人未だ其正体を知らず。」であり、清国については、

◎揚子江畔に伏竜あり。其数を知らず、就中大なるを哥老会と称す。……◎ビスマーク嘗て世界の三大怪物を数ふ。虚無党は其一にして哥老会は其二なりき。……◎聞説、哥老会、常に人材を擢て海外に学ばしめ、資金幾億、……恰も一大国家の如しと。◎茲に於てか、北京政府憂懼措く能はず。……哥老会孰ぞ然く輕拳に出でむや。時未だ至らざる也。

云々と、反政府勢力の存在があるために、日本はロシアや清国に勝っていないというのである。またこの「空中書」の最後を、「古羅馬の大業は之を支那の将来に待たむ乎。世界第二十一世紀の劈頭に大呼するも

の、夫れ李杜二聖を出せるの民乎。」と、李白や杜甫という偉大な文学者を出した国であるが故に、支那の将来に期待できると結んでいる。ロシアも清もどちらも未知数で、なおかつ政府権力をおびやかす虚無党と哥老会という存在のあることが、啄木にとって魅力があった。

つまり、啄木の大国に対する認識は、国家の政治や経済あるいは軍事的な規模などにより判断するのではなく、あくまでそこから生み出された偉大な政治家や宗教家や文化人といった存在により、また名も無き権力に反抗する民衆が存在しているということに対しての評価によって為されているのである。それが大国に対して、相対的な視点を得るモノサシになっているのではないかとも思われる。

おわりに

以上のように啄木のアメリカ観とロシア観に、多少なりとも共通した認識を二つ指摘できたのではないかと思う。一つは社会進化論をもとにした樗牛の「法則と生命」から生まれた、啄木なりの判断基準である。これは国家を生命体としてとらえ、老化し保守化し形骸化してしまっただらおしまいであると考え、それを刺激しもう一回若返りさせなければならぬとする判断基準であった。

この判断基準は啄木の生涯を貫く大きな認識であったことを、我々は「時代閉塞の現状」（明四三・八稿）の、次の部分によっても知ることができる。

我々青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなつた。強権の勢力は普く国内に行亘つてゐる。現代社会組織は其隅々まで発達してゐる。——さうして其発達が最早完成に近い程度まで進ん

である事は、其制度の有する欠陥の一日明白になつてゐる事によつて知ることが出来る。戦争とか豊作とか飢饉とか、すべて或偶然の出来事の発生するでなければ振興する見込の無い一般経済界の状態は何を語るか。

という具合に、ずっと啄木の中にあつた国家認識が、日本国家に向けられてゐるのを見ることができるのである。日本は既に発達が完成にまで近い程度に達して、閉塞してしまつてゐると現状認識をする。その打開の仕方に従来のように「戦争」という言葉も使われているが、しかし、それではいけないという論理の方が先行している。啄木はもっと違った打開の仕方を提案する。

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先ず此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

という具合に、「明日の考察」をして打開するといふのである。そこに、より現実的で成長した啄木の姿をみることが出来るであらう。

そしてもう一つの国家認識は、軍事力や兵隊の力ではなく、国家の中にどのくらいの潜在的な力、そしてそれらを引っ張ることのできる偉人や英雄などが存在しているかという視点からの判断である。なおこの二つは全く別個のものではなく、考えようによつてはつながっているもの

でもある。つまり、国家の中の偉人や英雄や潜在的な民衆の力こそ、保守化し形骸化した国家を打開する存在者としてイメージされていたとも考えられるからである。

しかし、もちろんこの二つだけから啄木がロシアやアメリカを認識していたわけではないのは当然である。語学の勉強と、文学への関心、そしてさらにその国に行ってみたいという、憧れを示す渡航熱などからも判断することができるであろう。それは別稿に記した。^⑩

最後に一言付け加えたいのは、それでは小国、あるいは社会進化論の「弱肉強食」「適者生存」の法則により、大国によって滅ぼされる弱国に対して啄木はどのような認識をもっていたのであろうかということである。本稿で詳しく触れることはできないが、拙稿「石川啄木における朝鮮^⑬」や「敗者への憐憫^⑭」で記したように、「亡国」としての「憐憫の情」が働いていたと思われるのである。

注

- ① 吉田孤羊『啄木とロシア』・洋々社・一九七三年四月。
- ② 志水速雄『日本人はなぜロシアが嫌いか』・山手書房新社・一九九二年三月。
- ③ 草鹿外吉『啄木とロシア文学』・季刊「ピエタロ」一二号・一九七一年秋。
- ④ 森一『啄木の思想と英文学』・洋々社・昭和五七年一二月。
- ⑤ 「日本大学国際関係学部」第一集・一九八〇年。
- ⑥ 上田博『石川啄木の文学』・桜楓社・昭和六二年四月。
- ⑦ 澤田次郎『近代日本人のアメリカ観』・慶応義塾大学出版会・一九九九年一月。
- ⑧ 鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』・思文閣出版・二〇〇一年七月。
- ⑨ 「石川啄木―社会進化論の影響（二）」・「明治大学日本文学」第二三

号、一九八五年七月、「石川啄木―社会進化論の影響（二）」・「明治大学大学院紀要」第三集・一九八六年二月。

⑩ 海野福寿『日本の歴史^⑪』・日清・日露戦争』・集英社・一九九二年一月。

⑪ 「明治大学人文科学研究紀要」第三七冊・一九九五年三月。

⑫ 拙著『石川啄木―国際性への視座』・おうふう・二〇〇六年三月。第二章「西欧への視座」の「アメリカとロシアへの接近と相違」。

⑬ 「石川啄木における朝鮮」・「明治大学文学部紀要『文芸研究』」六七号・一九九二年二月。

⑭ 国際啄木学会編『石川啄木事典』・おうふう・二〇〇一年九月のキーワード項目。

（明治大学政治経済学部教授）